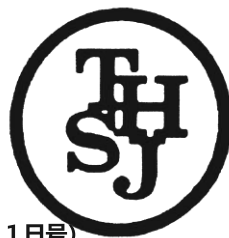
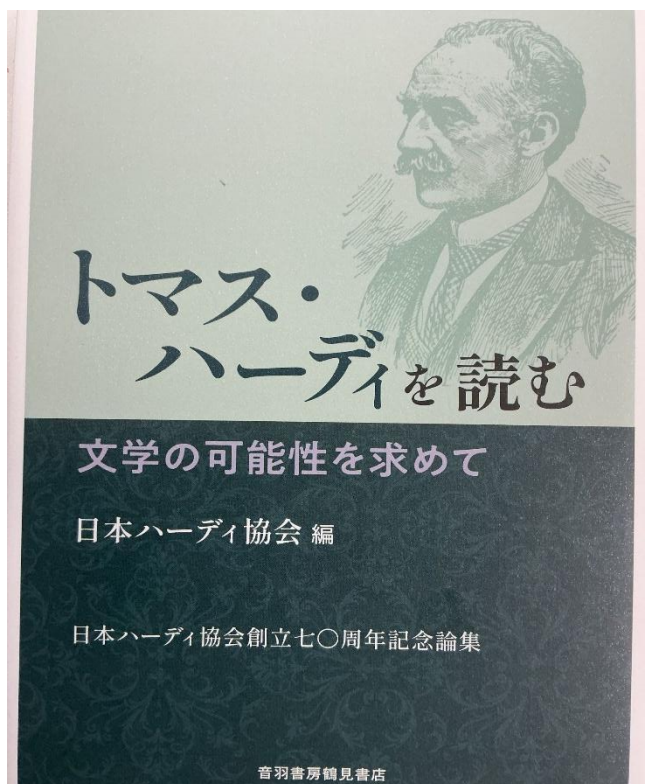


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第 100 号 (2026 年 9 月 1 日号)

発行者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25 名古屋学院大学外国語学部西村美保研究室内
日本ハーディ協会 jimmu.thsjapan@gmail.com
編集者 山内政樹 〒275-0023 習志野市芝園 2 - 1 - 2 千葉工業大学



(画像は編集者による)

お祝い

玉井 暉
(TAMAI Akira)

『日本ハーディ協会ニュース』が第 100 号を迎えたという。心よりお祝いを申しあげたい。私も、本誌になんとか執筆させていただいた。ここに掲載される文章は、ハーディ文学のおもしろい断面を鋭く衝いた「寸評」から、ハーディに出会った原風景を語る会員の皆さんの告白にいたるまで多種多様であるが、そこには同好の研究者の集まりとしての和やかな雰囲気が漂っている。ハー

ディ協会が学会である以上、優れた研究論文の発表をめざして切磋琢磨するのは当然であるとしても、そのような活動に寄り添って、こうしたちょっと肩の力を抜いた角度からの文章も、ハーディ研究に資する面があることを忘れてはならないだろう。

『恋の霊』におけるピアストンの友人サマーズの存在

玉井 暲
(TAMAI Akira)

『恋の霊』(1897)において、ジョスリン・ピアストンの友人アルフレッド・サマーズの存在をどのように受けとめたらよいのだろうか。ピアストンは彫刻家として、サマーズは風景画家として、ともに、芸術家としての業績が高く評価され、ロイヤル・アカデミーの会員に選ばれている。ところが、「恋の霊」をめぐる対応のかたちとその後の人生においては、まったく対照的な様子を見せる。

40歳を迎えたピアストンは、社交界で知り合った若い美貌の未亡人ニコラ・パイン＝エイヴォンといったとき親しくなったものの、その恋愛感情は長続きしない。かつて結婚寸前で裏切ったことのあるアヴィシ(初代)が死去したとの知らせを受けたものだから、その葬儀のために故郷の島を訪れたところ、残された子供であるアヴィシ2代目に出会うと、たちまちにして「恋の霊」がこの娘に宿ってしまって、これまで交際してきた、きわめて知的で教養もあるパイン＝エイヴォン夫人にたいして冷淡になってしまう。他方サマーズは、このチャンスを掴むかのように、ピアストンの愛を確かめるために島にやってきたパイン＝エイヴォン夫人に出会うと、ひとめぼれをしてしまって、つまりピアストンの言葉を借りれば「恋の霊」がパイン＝エイヴォン夫人に宿ってしまって、彼女との結婚の願望を友人サマーズに告白するのであった(第2部10章)。

二人に「恋の霊」が同じく宿ったといえ、この出来事の顛末はその後の人生においては対照的である。サマーズは、パイン＝エイヴォン夫人との結婚をどうやら難なく果たしたようで、子どもにも恵まれ、市民の生活としては幸福な家庭を築く。一方ピアストンは、「恋の霊」に繰り返し翻弄されつつ、芸術的理想を追い求め、独身のまま、芸術家としての生活を貫徹することになる。こうしてこの小説の物語空間には、人間の生きた方をめぐって、芸術家としての生活か、あるいはひとりの市民としての生活か、二つの対照的な世界が設定されているのに気づくのだ。

イギリスのヴィクトリア朝は、主人公(主として男性の登場人物)の自己実現を描いた、いわゆるビルドゥングスロマンが数多く産出された時代である。しかも、ヴィクトリア朝後期から20世紀に入っていくにしたがって、主人公が市民から芸術家へと次第に変移し、ジョイスの『若い芸術家の肖像』(1916)においてその頂点に達するように、ビルドゥングスロマンが芸術家小説としての性格を濃厚にしていくという展開を踏まえて見てみるならば、この『恋の霊』という小説は、そうした芸術家小説の典型に限りなく近づいているように思われる。芸術家としての成功、芸術創造に向かう衝動の消失という芸術家にとっての挫折、芸術家の生活と対比される市民的生活の存在、芸術家の末路といったモチーフが、主人公ピアストンのみならず、副主人公とも言えなくもないサマーズをも通して設定されているように思われるのだ。

サマーズが、この物語空間に初めて登場するのは、第1部6章である。サマーズは、アトリエを訪ねてきた20歳の青年ピアストンが、「恋の霊」という「奇妙な呪い」(“a curious curse”)に憑りつかれ、神秘的な恋愛感情に悩まされるありさまについて説明するのに耳を傾ける。ピアストンは、「恋の霊」が島の娘アヴィシ(初代)に宿り、結婚寸前まで進行していたところ、マーシャ・ベンカムと出会うと「恋の霊」が彼女に移ってしまったため、アヴィシを棄て、マーシャと駆け落ち同然でロンドンまで戻ってきたという。この神秘的な愛が、じつはピアストンの芸術創造の衝動をかき立てる根源的エネルギーに関わっていることを、サマーズはまったく想像できず、ひとりの市民としてきわめて常識的に、「男というのはきみ同様、飽きっぽいものさ」と断じ、マーシャとは結婚すべきではないと助言するのであった。

サマーズの生活は、結局、ひとりの市民として幸福な人生を実現した。その様子は、60歳に達したピアストンが滞在する島の近くの保養地に家族をつれて訪れたサマーズについての叙述が明らかにする(第3部4章)。サマーズは、「高名というよりは受けのいい画家となり」、「かつての特徴であった画題にたいする独特で個性的な審美眼は捨てられて」、「二流の鑑定士が室内装飾用に客に勧めるような、目を楽しませる自然風景を描く」画家になり果てている。とはいえサマーズは人気があって、「イギリスやアメリカの金持ちから高額の小切手を大量に受け取る身分にあって」、そのゆえ「豪華なアトリエと不格好な家而建て、成長する娘たちの教育費を支払うことができた」と評される。サマーズは、ピアストンと同じくロイヤル・アカデミーの会員でありながら、風景画家として芸術的理想を追う姿勢はどこへ行ったのか? とも言え、このアイロニカルな叙述は、サマーズを一方的に墮落した芸術家として裁く叙述ではなかろう。芸術家の末路に市民としての世俗的成功という自己実現が設定されているにしても、それを寛容な姿勢で受け止める眼差しがある。

この眼差しは、ピアストンにおいて、アヴィシ3代目との結婚が不首尾に終わり、「恋の霊」の呪いから解放され、芸術創造衝動も美意識も喪失した、その最晩年の人生を見つめる叙述に繋がっていくものであろう。かつての恋人マーシャと一緒に、座骨神経痛やリュウマチに悩まされる身を相互に労わりつつ、そのなかで、水道工事というきわめて実用的、非芸術的、市民的な活動に生きがいを見つけ勤しむ姿が叙述される(小説の最終章)。これを、芸術家の末路として、肯定的に、あるいは否定的に、つまり多義的に読むことができるかもしれない。しかし、サマーズの晩年の市民的幸福を得た生活の光景と重ね合わせて見る眼差しを取るならば、ここに肯定的ヴィジョンの存在を感得できるのではあるまいか。ピアストンとサマーズという二人の芸術家が辿った末路は、たとえ芸術家としての慣習的な末路から逸脱したものであったとしても、現実世界に生きる市民として人生の終末を迎えたその光景がそれ自体で了解されているとすれば、このヴィジョンこそ、ハーディが最後の小説でかつ芸術家小説である『恋の霊』において表象しようと挑戦したライトモチーフであったのではあるまいか。

『協会ニュース』と私、あるいは『協会ニュース』 第100号に寄せて

新妻 昭彦

(NIITSUMA Akihiko)

『日本ハーディ協会ニュース』が今号で100号になるという。年間2号の発行であるから、計算上は50年目を迎えたことになる。調べてみると、事実、第1号の発行は1977年の4月で、日本ハーディ協会は1957年10月に創立されているから、創立20周年にあたる年度に、従来から刊行されていた『日本ハーディ協会会報』から分離独立する形で創刊されたことになる—「従来の『協会会報』は、やはり隔年刊とし、専らハーディ文学研究・批評・他作家との比較などの比較的長い論文類（和文及び英文）を載せる機関誌」とし、「この『ニュース』は、協会の連絡事項、決定事項、会員の消息、海外からの連絡、新文献（内・外）の報告、会員相互の連絡・協同の為になる短信などを、年2-3回編集し、会員に頒布してゆきたい」（『日本ハーディ協会ニュース』第1号）。それから休刊することなく50年が経ち、70周年にあたる来年度からは、新たに200号を目指して101号が発行されることになる。編集を担当した会員は、2年任期なので、およそ25名。執筆者は、のべ人数であれば、数百名に及ぶことになる。50年間100号は、これらの会員と『協会ニュース』を読み続けた全会員の総力の成果であることは言うまでもない。

会長、いわんや顧問と『協会ニュース』との関連はさほど強くないし、まして貢献度に至ってはほぼないと言っても過言ではないだろう。多くは、編集者の裁量にまかされている。そうすることで、各号がそれぞれ個性的になる。この「裁量」によって、編集者個々の人脈、嗜好に志向、独自性などが発揮されることになるからだが、その反面、辛勞を伴うことになるのもまた事実であろう。『協会ニュース』には、「ハーディと私」「ハーディと私 その後」も含めて、数度執筆しているが、最も印象に深いのは、編集を担当した2年間であることは言うまでもない。私が担当したのは、1999-2000年、第45号から第48号である。このとき印刷所が京都から東京深川のキンコー（キンコーズではない）に移った。その後、中央大学生協を経て現在のPDFファイルによる電子ジャーナルに至っている。メールが一般化するのは、大学においても21世紀に入ってからで、当時はまだ電話と郵便、あとは原稿が瞬時に転送される夢のような機器FAXがあるばかりだった。原稿の依頼には、往復はがきを使ったような記憶がある。ありがたいことに、依頼はほぼ快諾いただいたように思う。だいたい前に出した依頼のはがきの返事が、忘れたころに届いたことがあった。なんでも、空き室の郵便受けに誤配されたままになっていたという。即座に『テス』の挿話を想起したのは言うまでもない。原稿はワープロでプリントアウトしたものか、今や絶滅危惧種であるフロッピーディスクで自宅に郵送されて来る。投稿原稿のために、巻頭の編集者名の横には、自宅住所が記されていた。個人情報保護法以降、現在では、所属大学の住所かメールアドレスがこれに代わっている。それまでは、会員名簿が隔年で『協会ニュース』に挟み込まれることになっていた。これがなくなって久しい。住所録というものも、フロッピーディスク同様に絶滅するかもしれない。

当時は、入会してまだ間がなかったため、執筆者にまったく当てがえない。「ハーディと私」にお世話になり、それでも足りないの、ハーディ関連の著書を出版した会員に、「あとがきには書け

なかったこと」を依頼するという手を苦し紛れに捻り出した。あとは、執筆者に別の執筆者を紹介してもらって、なんとか綱渡りで2年間4号を凌いだというのが実状で、冷や汗のかきっぱなしだっただけに印象深い。『協会ニュース』の多様性と独自性は、編集担当者の創意と労苦の賜物であると実感をもって断言できる所以でもある。

学会を設立するに際して必要なことは、会員を募り、年会費を徴収し、大会を開き、学会誌を刊行することである。日本ハーディ協会も、設立の翌年の1958年には大会を開催し、『日本ハーディ協会会報』第1号を刊行した。そこに掲載された「日本ハーディ協会の設立のために」には「会員の連絡のため会報を、また研究発表機関として機関誌『ハーディ研究』の刊行を謳っていた。まず刊行されたのは、「会員の連絡」を要とする『会報』の方で、したがって英語名は“Bulletin”。やがてこの『会報』に論文も掲載されるようになり、投稿論文が公募されるようになる。20年の時を経て「会員の連絡」のための会員消息、出版物や発表論文の紹介、大会予告と報告記などは、『協会ニュース』に移譲される。「会報」が「研究」を乗っ取ったような形だが、2000年第26号からは「ハーディ研究」が表紙に大書されるようになり、2024年第50号を機に英語表記も“Bulletin”から“Journal”に変わった。ただ、いまだにその表紙に「日本ハーディ協会会報」が残っているところが、いかにもハーディ／協会らしいとも言えようが、ここに創設時の初志が達成されたことになる。『協会ニュース』の元来の使命であった、会員の消息や大会情報などの速報は、メールやホームページにとって代われようとしているが、逆にそれによって自由と可能性とは拡大することになる。今後とも、『ハーディ研究』と両輪となって、ハーディ協会を支えていくことを期待してやまない。

『日本ハーディ協会ニュース』第100号を迎えて ——エッセイのさりげない魅力と至福のとき——

金子 幸男

(KANeko Yukio)

2017年は、協会創立70周年、記念論文集もこの2月に無事刊行できて慶賀に堪えない。このような思いに浸っていたら、『協会ニュース』編集長から、次号で100号を迎えるので、何か書いてもらえませんかという依頼が来た。日頃、何号まで来たかなど考えてもみなかったので、もう100号まで到達したのかという思いであった。エッセイ、ハーディと私、研究報告、授業実践、大学事情、大会印象記、事務局よりのお知らせ、編集後記などを掲載していることはわかっているけど、どんな読後感を抱いたかと言われると、よく思い出せない。そこで2010年第68号から、2018年第84号まで、デジタル版を熟読してみた。といってもすべてではなく、一部エッセイのみである。

読んでみてどれも心をうつ、素晴らしい、内容のあるエッセイばかりであった。一語一語噛みしめながら、また途中、一息ついてはハーディの姿を想像しながら読んだので時間がかかってしまった。しかし、こののんびり読むという行為も憂さを少しの間だけでも遠ざけてくれる至福の時であった。以下、敬称は省略させていただく。

「ハーディ夫妻の新婚の家―サービトン(1874-75)」(2010年68号、鮎澤乗光)は、サービトンをエマの父がいとこの娘アニーとともに訪問しハーディとの和解があったのかどうかという内容である。「晩年のハーディのある午後」(2011年70号、深澤俊)は、ヴァージニア・ウルフが夫レナードと共にマックスゲイトのハーディを訪問(1926年7月23日)したときの様子を扱ったもので日常の一場面を垣間みる楽しさがある。「Florence E. Hardy 夫人の書簡とそこに垣間見る晩年の Hardy」(同号、大榎茂行)は、甲南女子大学図書館が学園創立90周年記念として所蔵する貴重書の図録を刊行、その中に「トマス・ハーディ・コレクション」も含まれていることに言及、フローレンスが手紙のなかで、ハーディはジェイムズの『黄金の盃』の登場人物が嫌いだったという点を指摘している点が面白い。「トマス・ハーディ全集 完訳本への思い入れ」(2012年71号、内田能嗣)は、内田能嗣先生が吉川道夫先生とともに、自身の恩師、内田毅先生と後藤義之進先生から生前、全集訳刊行を託され、弟子として出版社探しに苦労しつつも、大阪教育図書の横山哲彌社長のご尽力で刊行できたことを語ったもので、胸が熱くなる。内田先生といえば、教え子の面倒見が大変よい先生で、ハーディ協会にも多くの教え子の方が入会されていた。一時期の活況を生み出していただいた。感謝するばかりである。「墓場の恋人たち」(2012年71号、海老根宏)は昨年亡くなられたばかりの海老根宏先生がハーディの詩を論じたもので、一幅の絵画をみているような珠玉のエッセイである。海老根先生は協会の役員ではなく一兵卒であったが、最後の最後まで協会員を貫かれた。最後に一冊の著書を残されたことは本当に尊いことだと思う。教え子の方たちから海老根先生の授業の、周到な準備による質の高さを伺ったことがある。「2011.3.11の震災を振り返って」(2012年71号、市原聡子)は東日本大震災を語った貴重な印象記となっている。「『詩集I』の翻訳と編集を終えて」(2013年73号、渡千鶴子)は、第1〜3詩集に関西のハーディの詩の読書会のメンバー、総勢20名で取り組んだものであるとのこと、圧倒される思いである。「The Return of the Nativeにおける『古代』のイメージ」補遺」(同号、唐戸信嘉)は、ウィリアム・バーンズの文献学からフォークロアまでを論じた役に立つ研究メモである。「ハーディ研究の昨今―J. ヒリス・ミラーの場合」(同号、西村智)は、脱構築からヒントを得たミラーが、オースティンの発話行為論をつかった見事な分析を『キャスターブリッジの町長』に対して行ったことへの言及である。「『ジュード』のなかのモダニズム／ゴシック」(2013年74号、玉井暉)は、ファーザータイムが幼い弟妹を殺して自殺を図ったという事件を、ゴシックの延長ととらえるのか、20世紀のモダニズムを志向するものなのかを探ったもの。「トマス・ハーディの描いた「夜」の深意について」(2014年75号、那須雅吾)は、ハーディの小説において、昼の場面よりも夜の場面がいかに重要かを作品に即して論じたもので、感銘を受けた珠玉のエッセイである。ハーディの幽霊や幻影とナショナル・アイデンティティに関心がある私にとっては靈感を与えてくれるエッセイだった。那須先生に感謝。「マンスフィールドの手紙と日記から」(2014年75号、久保木雅子)は夭折の小説家マンスフィールドがハーディのファンであったことを教えてくれる。「二人の詩人と二つの詩」(2014年76号、橘智子)は、ブラウニングが妻エリザベスと死後の再会を確信できるほど深い愛情で結ばれていたのに対し、ハーディは亡き妻と訪れた場所を詩に詠うのがせいぜいで天上の再会を楽しみにするほど深い愛情は抱いていなかったという指摘が面白い。エンジェルがデスに死後の再会を約束できなかった場面を彷彿とさせる。「協会の伝統と将来」(2015年77号、新妻昭彦)は、新妻昭彦先生の会長就任のあいさつだが、立教大学に『協会ニュース』第1号からすべてそろっているという驚くべき事実が明らかにされている。「ハーディとバラッドの伝統」(2015年77号、近藤和子)は、ハーディ研究においてバラッドを研究する際の基

本文献に触れられており大変参考になった。「過去からの声——大澤衛初代会長のエッセイをめぐって——」（2016年80号、木梨由利）は、昭和21年『北國新聞』に掲載された、当時まだ旧制4高教授だった大澤衛先生の、古い新聞の記事の切れ端を発見した筆者の感想をつづったものである。記事はトマス・モアの『ユートピア』を扱ったものとのこと、貴重な歴史上の1コマを見させていただいた気がする。「ハーディの面白さ—その豊かさと奥深さ—」（2017年82号、宮崎隆義）では、悲劇的な面を冷徹に描きながらも、そこはかとないユーモアを言葉に込めていることがハーディの作品を豊かな奥深いものにしているという。「Darwinianとしてのハーディとファウルズ —「共感」をめぐって—」（2017年、福原俊平）では、ヒトという生物にとり、物語が果たす役割は他者の心情を推測する心の機能を鍛えることであるという心の理論（theory of mind）を紹介する。「ハーディのこだわり」（2018年83号、塩谷清人）では、子供時代を描かず、思春期以降の人間が時代と格闘する点に、ハーディのこだわりがあるといい、G・エリオットの描く女性たちとハーディの女性たちを比べる。T・ハーディ文学の立ち位置—「記憶・忘却と時」と「文学が果たす役割」をめぐって（2018年83号、土屋倭子）は、2017年末が、カズオ・イシグロがノーベル賞を取った年であることを教えてくれる。もう10年前のことなのだ。土屋氏はイシグロ氏の発言に誘発されて、「記憶・忘却と時」と「文学が果たす役割」をハーディに探求している。意識の「時」は「記憶・忘却」と連動し自由に動き出す、不可解で制御不能のもの、文学の役割は共感の拡大により世界の改善をめざすことにあるという。

以上、エッセイ中心に読んでみたが、本当に一つ一つが心にささってくるエッセイばかりで紙面の制約で他のエッセイを紹介できないのが残念である。今後、今回扱った時期以後の『協会ニュース』についても読ませていただいて、リフレッシュしたいと思う。各会員がもっている研究者としてのポテンシャルを考えるにつけ、協会自体の文化資本は大したものだと認識を新たにしたい次第である。100号を超えても、『協会ニュース』が発展していくことを願うばかりである。

＜シンポジウム予告＞

ハーディとジェイムズにおける変容の諸相 ——怪奇小説、新しい女、プロフェッショナルリズム、 創作作法

はじめに

金子 幸男

(KANEKO Yukio)

今回のシンポジウムは、日本ヘンリー・ジェイムズ協会からお二人をお招きして行うことになった。ヘンリー・ジェイムズ（1843-1916）とトマス・ハーディ（1840-1928）を並べてみると、生没年がほぼ重なっていることが分かり、同じ時代の空気を呼吸していたことが分かる。ジェイムズはアメリカのニューヨークの裕福な家庭に生まれ、哲学者である父の自由を大切にする教育を受け、

イングランド、フランス、スイス、ドイツなどを若いころから家族で旅行し、知識と教養を身につけた。若き日から作家をめざし、1880年代初期にイギリスに定住、ロンドンを基点にして数々の作品を生み出し、死の直前にイギリスに帰化した。ハーディのほうはイングランド南西部ドーチェスター界隈の田舎に石工の頭領の息子として生まれたので労働者階級に属する。専門職である建築家になった後、小説家に転身し、イングランド南西部にウェセックスという地名を与えて数々の小説を書いた後、詩人としても多くの作品を残す。社交界の季節は田舎を離れてロンドンで過ごすことが常であったハーディはジェイムズとは1880年代初めから知り合いになり、ロンドンのクラブや共通の友人エドモンド・ゴス宅で交流を続けた。コスモポリタンなジェイムズは、土着気質のハーディとは馬が合わなかったようだ。正反対の二人ではあるが世紀末から世紀の変わり目における問題意識を共有していたと考えられる。ゴシック、女性観、職業観、創作作法について、社会が激しく変化しつつあるときに、二人の作家はどのようなとらえ方をしていたのかをこのシンポジウムでは見てゆく。

ヘンリー・ジェイムズの怪奇小説における喪失：ハーディとの比較のために

宮澤 優樹

(MIYAZAWA Yuki)

ヘンリー・ジェイムズの怪奇小説は、幽霊の目撃という超自然的な出来事を表面的には扱いながら、その内実においてはより複雑な心理的・現象学的経験を主題とすることが、しばしば指摘されてきた。本発表はその前提に立ちながら、「にぎやかな街角」(“The Jolly Corner,” 1908)を軸として、ジェイムズの書く幽霊が喪失の体験をいかに物語として造形しているかを検討する。主人公ペンサー・ブライドンが見つめる幽霊のような幻影は、急速に都市化するニューヨークを背景に、若かった頃アメリカに留まっていればあり得たであろうもう一人の自分、すなわち選ばれることなく、ついに生きられることのなかった自己である。現実には一度も所有したことがないにもかかわらず、彼はそれを喪失として悼む。この逆説が際立たせるものを、ジェイムズが怪奇小説の中で描く喪失の特質の一つとして考察したい。喪失は、トマス・ハーディもまた小説や詩作品において取り組んだ題材でもある。変化しゆく社会を背景とした仮想によって作られるジェイムズの逆説的な喪失と、ハーディの描く喪失とを対照させることによって、両者を比較するための一つの視点を示したい。

世紀転換期のジェイムズと「新しい女」

松浦 恵美

(Matsuura Megumi)

ヘンリー・ジェイムズは多彩なヒロインや女性登場人物を描いたことで広く知られている。彼が作家活動を行った19世紀後半から20世紀初頭は、女性の社会的地位に大きな変化が起こる中で「新しい女」が登場した時期に重なる。しかし、世紀転換期のジェイムズ作品には、むしろ「新しい女」の定義に沿わない女性が多くみられる。また、当時の「新しい女」が政治的な権利や社会的地位の向上を求めたのに対し、ジェイムズの女性登場人物たちが直面し、あるいは求めるのは、必ずしもそうした現実の社会における変化とは言えない。批評家のマーサ・バンタは、現実の「新しい女」に対するジェイムズの関心の不足を指摘するが、ではジェイムズの「新しい女」に対する姿勢はどのようなものだったのだろうか。本発表では、『ポイントンの蒐集品』(1897)、『檻の中』

(1898)、『ねじの回転』(1898)などのテキストや、20世紀初頭の女性参政権運動に対するジェイムズの反応を中心に、世紀転換期のジェイムズの女性表象を再検討する。同時に、同時期のハーディ作品における女性登場人物を参照し、「新しい女」に対するジェイムズとハーディの姿勢の差異についても考察を試みる。

ハーディとジェイムズにおける「芸術家小説」(Künstlerroman): プロフェッションとしての彫刻家

杉村 醇子

(SUGIMURA Junko)

本発表では、トマス・ハーディの『恋の霊』を芸術家小説(Künstlerroman)の視点で読み直す。本作再評価の立役者の一人ヒリス・ミラーは1970年代に『恋の霊』を、芸術について書かれた19世紀小説のうち最も重要な作品の一つと高く評価した。しかし芸術家小説が19世紀後半に英語圏文壇で隆盛を極めたにもかかわらず、本ジャンルの枠組みを手がかりに読み解く研究は多くないように思われる。そのため初めにモーリス・ビービの *Ivory Towers and Sacred Founts* 等、主要先行研究を参照しつつ『恋の霊』のジャンル面における類似と逸脱を検討する。次に世代を超えて理想美を追求するジョスリン・ピアストンの人物像を、ヴィクトリア朝の職業芸術家の誕生という文脈で考察する。ハーディ作品の中で例外的に社会的成功を享受するピアストンの姿を、エドモンド・ゴスが提唱した New Sculpture 運動も視野に入れつつ、「プロフェッションとしての彫刻家」という視点から再考したい。その際、『ロデリック・ハドソン』をはじめとして芸術家の生を多様に描いたヘンリー・ジェイムズの作品と対照化することにもなるだろう。これらの作業を通じて、世紀末の英語圏における芸術家小説の新たな一面を示すことが本発表の目的である。

「語りえないもの」をいかに語るか ——ハーディとジェイムズにおける語りの機能とリアリズムの射程——

麻島 徳子

(ASAHATA Noriko)

本発表は、トマス・ハーディとヘンリー・ジェイムズの小説を並べて読むとき、両者を単なる telling と showing の対立や、ヴィクトリア朝リアリズムとモダニズムの対比として整理するだけでは捉えきれない論点があるのではないかという問題意識から出発する。こうした枠組みを再検討する視座として、本発表ではウェイン・ブースの語りの理論に依拠し、語りの技法を優劣ではなく、作品が特定の効果を達成するために選択される修辞的手段として捉える。

この視座の妥当性を検討するため、『ダーバヴィル家のテスト』(1891)と『ある婦人の肖像』(1881)を取り上げる。ハーディは語り手の介入的・説明的語りによって出来事の因果関係を明示し、ジェイムズは語りの抑制と視点の限定によって意味の確定を読者に委ねるという対照的手法を用いる。しかしこの差異は単なる様式の違いではなく、個人の過酷な経験や内面をいかにリアリズムの枠内で物語として成立させるかという要請に応じて選択されたものと考えられる。

両者はいずれも、時間の不可逆性や行為の結果責任といったリアリズム小説の基本条件を前提としており、その意味でリアリズムの枠組み自体を逸脱するものではない。むしろその枠内で、語り

の過剰と抑制という異なる方法を通して、リアリズム小説がいかに経験を構成しうるかを示している。

本発表は、この語りの差異そのものがリアリズム小説の射程を規定している点に注目し、その差異を 19 世紀後半のリアリズム小説における語りの変化を考えるための一つの視座として提示することで、リアリズム小説の成立条件と限界について多角的な討議に資することを目的とする。

《特別講演予告》

人の家を見に行く習慣

東京大学教授
新井 潤美
(ARAI Megumi)

トマス・ハーディの小説 *The Hand of Ethelberta: A Comedy in Chapters* (1876 年) では、若い未亡人であるエセルバータが、ネイという資産家の男性に結婚を申し込まれ、答えを保留にしたまま、人目につかないように、夜にこっそり彼の田舎の邸宅を偵察に行き、それが期待どおりでないことになりがっかりする。しかも、屋敷を見に行ったことがネイにばれてしまう。ネイは、相手がわざわざ自分の家を見に来たことを良い兆候と期待しながらも、相手の行為を半ば軽蔑せざるを得ない。このエピソードは、この小説が書かれた 60 年以上前に出版された別の作品の中のエピソードを連想させるかもしれない。ジェイン・オースティンの *Pride and Prejudice* (1813 年) ではヒロインのエリザベスが、自分に結婚の申し込みをした（そしてきっぱりと断った）ダーシーの邸宅のペンバリーを、彼が不在だと聞いて見に行くが、予定よりも一日早く帰宅したダーシーと鉢合わせして、相手にどう思われるだろうかと恥入り、動揺するのである。

実際、エリザベスがペンバリーを見に行つてこの邸宅の規模と、富の蓄積を目のあたりにしたことによって、ダーシーを再評価したのだという、シニカルな見方もある。そして、一度プロポーズを断った相手の自宅を、理由がなんであれ、わざわざ見に行くのはあまり感心すべき行動とは言えないかもしれない。プロポーズを受けた相手の屋敷を、主人が不在のときにこっそりと見に行くという行為は、相手を値踏みする、浅ましい行為と解釈されても仕方がないわけで、*Pride and Prejudice* の注釈付きの版ではこのエピソードに関して、「当時は人のお屋敷を見に行く習慣は一般的だった」といった説明がわざわざつけられていることもある。

本発表では「人の家を見に行く」という行為がオースティンの時代からハーディの時代、そしてその後の時代にかけて、どのように、どんな階級の人々の間に広まっていったのか、その変遷と発展を、いくつかの文学作品の例に目を向けながら辿っていきたい。

《内外ニュース》

河内恵子（監修）、原田範行・麻生えりか（編著）、河内恵子・中村哲子・宮丸裕二・永井容子・川端康雄・守重真雄・鈴木英明・緋田亮・巽孝之・玉井暉・小宮彩加・近藤康裕・遠藤不比人・永嶋友・奥畑豊（著）、『イギリス小説研究の最前線 一八世紀から現代まで』（音羽書房鶴見書店、2026年3月）

デイヴィッド・ロッジ『現代文学の表現様式——メタファー、メトニミー、現代文学の類型学』
玉井暉・村里好俊訳（小鳥遊書房、2026年4月）

《編集後記》

協会ニュース第100号をお届けします。今年、日本ハーディ協会は創立70周年を迎え、記念論集の出版、ならびに『協会ニュース』通算100号という大きな節目を迎えることができました。

顧みますと、第1号が発行された1977年は、奇しくも私が生を受けた年でもあります。この50年近くの間、大学や文学を取り巻く環境は著しく変化いたしました。記念すべき100号の編集に携われたことに、深い感慨と不思議な巡り合わせを感じております。

これまで協会ニュースを支え、この2年間温かいご協力を賜りました先生方に、心より御礼申し上げます。

次の101号からは、新たな編集長のもとで次の歴史が始まります。時代がいかに逆境にあらうとも、本ニュースが150号、200号と末永く続いていくことを切に願っております。

ご多忙の中、玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。今号もバラエティに富み、充実した内容の記事が揃いました。次号は2027年4月発行予定で、投稿の締め切りは2027年2月20日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。（編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。）ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第100号

HP公開日 2026年9月1日

編集者 山内 政樹

(YAMAUCHI Masaki)
